

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人はこれまで、ヨーロッパに咲いた文明の「花」を切り取ってきて、シンペンに飾ることを勉強だと思い、それを模倣することをもって社会の進歩と考えてきた。大学教育なども切り花専門の花屋で、ギリシャ以来の名花をそろえ、これを知らなければ恥だと、学生に押しつけてきた。

これでは、いかにして花を咲かすかを考える暇は、もちろんない。しかし、花屋へ通ったおかげで、花が美しいということは知っている。そういう教育が普及した結果、サラリーマンにも切り花を買った人が増加したが、反面、花は適当に切りとられているもの、根がないものという錯覚を生んでしまった。

(1) 花屋を知らなかった昔の人のほうが球根を買い、育てることができた。いまは切り花の知識で人生を始める。そのために、根がなければ花は咲かないという認識を欠いている。

最近、勤めをもつ人のあいだで知的な関心が高まり、自由時間を利用して精神的なものを求めようという志向が強くなったのは、進歩といつてよいだろう。(2) 見たところでは、その関心の半分以上は、咲いた花のほうに向けられていて、新しい流行の切り花を追うのに時間と努力が費やされている。これにも、それなりの装飾効果はあるにせよ、ひとしきりの花の命を楽しむだけで、散ってしまえばあとは何も残らない。といって、突然、切り花はだめだと禁止的になることも不可能だろう。さまざまな花の中からみずからの好むものを選び、その次に、どうしたらそれを自分の力で咲かせることができるかを考えてみたい。(3) まず「切り花から球根へ」という発想の切り換えを考えたいと思う。

花といえば、世阿弥は『風姿花伝』の中でつぎのような意味のことをいっている。「二十五歳になって、芸というものに目覚めなければ、いくら修行してもモノにはならない。しかし、そこで目が開かれれば、自分の父がそうであったように、老年になっても花が咲き、しかも散ることがない」

自由時間をいかに過ごそうかと考えている人々にとって、これは傾聴すべきことではないだろうか。どんなに貧しく、つましい花であっても自分の育てた根から出たものには、流行の切り花とは違った存在価値がある。それが本当の意味での「ライフワーク」である。

学者でなくても、芸術家でなくても、あらゆる人にライフワークは可能である。しかし、現実には日本では「ここにライフワークあり」といえる仕事をした人はごくわずかしい。若い時は意気天を衝く勢いだ、すこし年齢をとって管理職にでもなると、もういけな

い。シノウ部になるといよいよダメになる。ところが、ヨーロッパにおけるライフワークは、文字通り生涯の仕事であって、晩年になって初めてケツジツする。この差は、自分自身の花か借りものか、根のついた花か切り花かという点にあるのではないだろうか。

人生全体から見れば、自由時間は、小学校に入るまでと定年などで仕事の第一線から退いた後の時代ということになる。(4) 人生の初めと終わりに自由時間があり、真中は仕事である。ことに最近、平均寿命が長くなって、定年後にはいつまでも暮れない薄暮のように時間が延々と続くことになった。

自由時間というと、いまの人は週休二日をどう過ごすかのことだと考えやすいが、人生の計画として問題なのは、むしろ二十年は続く「薄暮」のほうであろう。

いままでは、はじめにいってん充電したバッテリーを使い切るまで突っ走るといふ形で、仕事をしてきた。しかし、これからの社会では、絶えずバッテリーに充電するか、他日に備えてスペアをもっていないと危険である。いま勤めている会社に万一のことがあったら、スペアを使って生き抜かなければならない。それは単にホケンの意味ではない。自分の生きがいとして、人生の豊かさにつながるところで、能力の備蓄、可能性のゆとりを持つことである。

毎週末の、あるいは毎日の自由時間は、こうした精神的なチョコキンをつくり、生涯の自由時間にライフワークの花を咲かせるために使われるべきだ。

《中略》

自由な時間を上手に使うというのは、やれゴルフだやれマージャンだと、ぎっしりつまったスケジュールをこなすことではない。まず、何もしないでボーッとする時間をもつことだ。充実した無為の時間をつくることである、これがやってみると、意外に難しい。たいていの人は、空白な時間を怖れる。よほど強い個性でないと、ぼんやりしていることはできないのである。本を読むのも結構だが、読まないのもまた、きわめて大切な勉強である。週に一度は、家族から離れて一人になってみるのもいい。

自分だけの時間をつくることは、長い目でみれば、いちばんの精神的な肥料になる。自分のつちかった球根が芽をふき、葉をのびしたあと、どれだけ大きな花を咲かせるかは、過去にどの程度、実りある空白があったか、充実した無為があったかにかかっている。

空白の時間の中から、自分の知的関心をそそるものを探し出して、自由な時間の中で育て伸ばして行く。それは当面の仕事となるべく関連の少ないものが望ましい。囲碁にたとえるなら、石と石の間をぐっと離して、一見、関連のないような布石をすることだ。

やがて、人生の□に達したとき、離れたように見えた石と石とが、おのずからつながって「盤上ことごとくわが陣地なり」という終局を迎えることができる。これが、ライフワークである。

- (注1) 模倣 …… 他のをまねること。
- (注2) 『風姿花伝』 …… 能楽(歌と舞で構成された楽劇)者である世阿弥が著した芸術論。
- (注3) 傾聴 …… 話を熱心に聞くこと。
- (注4) 意気天を衝く勢い …… 心持ちが天を衝くほど盛んなようす。
- (注5) バッテリー …… 蓄電池。
- (注6) スペア …… 予備。
- (注7) スケジュール …… 予定。
- (注8) 布石 …… 囲碁で、はじめに全体を見通して打つ碁石の配置の仕方。
- (注9) 終局 …… 碁を打ち終わること。

問一 部ア～オのカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。(かい書で、ていねいに書くこと。)

問二 (1) (4) に入る最もふさわしい語を次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

ア・むしろ イ・つまり ウ・しかし エ・なぜならば オ・そこで

問三 部①「それなりの装飾効果はある」とはどういうことをいっていますか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア・不完全ながらもその人の人生を豊かにすることはできる。
- イ・その人の学力全体を継続的に引き上げることができる。
- ウ・その人の日常生活を美しい花を使って飾ることはできる。
- エ・一時的ではあるがその人の表情を明るくすることはできる。
- オ・その人を少しは知識があるような人に見せることはできる。

問四 部②「実りある空白」とありますが、「空白」とはどのような時間ですか。十五字以内で答えなさい。

問五 に入る最もふさわしいことを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア・思春期 イ・安定期 ウ・氷河期 エ・転換期 オ・収穫期

問六 本文で筆者は「ライフワーク」をどのように考えていますか。その考えとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア・老年になるまで生きがいとして自分が打ち込んできた職場での成果であると考えている。
- イ・自由時間を使って知的な関心を高めることのできる装飾的な教育であると考えている。
- ウ・老年になって初めて完成する人生の豊かさを手に入れるための活動であると考えている。
- エ・自由な時間を日々充実したものにした結果得られる精神的な成長であると考えている。
- オ・老年になるまでの生涯を費やして取り組む価値のある芸術的な創作であると考えている。

問七 部「切り花から球根へ」という発想の転換は、個人の人生にあてはめて考えるとどういうことになりますか。文章全体を通して六十字以内で説明しなさい。

問八 本文の内容に当てはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア・日本人はヨーロッパ文明を学ぶことを社会の進歩と考えてきたが、それは思い込みすぎないことに気付くべきである。
- イ・花屋ではしばらくすると散ってしまう切り花を買うのではなく、花本来の美しさで長く咲く球根を選んで買うべきである。
- ウ・日本人は、若い時は才能ある人も年齢を重ねるにつれて無能になるので、ヨーロッパの文明を学び、見習うべきである。
- エ・若いうちまでに取り入れた知識をよりどころとして生きていくのではなく、仕事の中から生きがいを見つけるべきである。
- オ・ゴルフをすることより大切なのは、本を読むことであり、本を読んだ後じっくりと内容を考えることが何より重要である。

主人公の少年は、布で顔をぐるぐる巻きにした男から願いがかなう魔法のリコーダーの話を聞きました。少年は病気の妹のためにその笛を買う決意をし、その男とカフェ（喫茶店）で待ち合わせをすることになりました。以下の文章は、それに続くものです。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

テーブルのふちをにぎったぼくは、あからさまに①拍子抜けた顔をしていたんだとおもう。まかふしぎな模様や呪文が刻まれた、あやしげな笛を想像していたからだ。男はちっちゃと舌をうって、これは自分の師匠の家に何代ものあいだ伝わった秘密の笛だ、何人もの魔法つかいが秘儀をこらしてつくりあげたのだ、といった。

「要らないのなら、もうはなしは終わりだ」

「待ってください！」

ぼくはいつともう一度そのリコーダーをみた。小学校でつかってたのより、いくぶんか大きい。ぼくの頭をこづいた音楽教師の笛より、たしかに立派そうにみえる（ぼくの音楽の成績はさんたんたるものだった）。

「これをどうつかうんですか」

「実にかんたんだよ。わたしが誰にもつかってもらえるよう改良しておいた」

男は顔をおおう布のあいだに吹き口をさしこみ、ちらちらと手指を動かしながらことばをつづけた。願いをかなえるには、同じ曲を七回くりかえして吹き鳴らす。そのあいだずっと、胸のなかで願い事をとなえつづけていること。うまく吹けるかどうかはたいした問題じゃない。祈る強さこそが、魔法をかけるこつなのだそう。音感がわるいぼくはちょっぴりだけ（１）した。

「おたくら、ちょっといいかね」

ふりかえると店のご主人がお盆をもち、しかめっ面を男にむけ立っていた。ぐるぐる巻きの男はなんにもこたえない。

ご主人は咳払いをして話をつづけた。

「おれはね、この店を四十年きりもりしている。もとは青物屋だったんだよ。これまでカウンターのなかから、いろんなお客を見てきた、そいつの性根がどんな風なのか、ひと目みりゃあ、だいたいわかったまうくらいまでおいばれもした。この坊主のおやじだってがきの頃からおれは知ってる。多少けんかつ早いところはあるが、根は気のいいやつなんだよ」

「父さんはここへはあんまり……」

いいかけたぼくに、

「おまえは黙っているな」

ご主人は（２）いった。

「いいか、この坊主は、おやじよりよほど肝はすわっている。ただ、まだ十二歳ぼっちだ。男同士のとりひきに口をはさんで申し訳ないが、おたく、ほんとうにそのおんぼろ笛をこの坊主に売りつけるつもりなのかね」

ぐるぐる男はしばらくの沈黙のあと、

「その子に聞いてみたほうがいいな」といった。

「欲しがっているのはその子なんだから」

ご主人はぼつぼつと鼻の先をかいてぼくのほうへ目を落とした。ぼくはなんだか無性に腹立たしく、また、それがなんのせいだかわからず目見当もつかなくて、ただひたすら口を結び、テーブルの上をにらんでいた。男がそのとき、布のなかでけはんけはんとかを咳をした。

「あ、まだだ。いままだ、いもうとさん、発作がきたみたいだな」

かぼそい声でつぶやく。

「発作だど？」

ご主人の口調が変わった。

「おたく、そんなこともわかるってのか？」

すっとんきょうな声で叫ぶ。

「もちろんだとも」

男は深々とうなずいて、

「すごく苦しがつてる。わたしにはわかる」

ぼくは椅子から跳ねあがり、男の手からリコーダーをひたたくと、ポケットから封筒をだしてテーブルにたたきふせた。三年かけてためたアルバイト料の半分。来年手こぎボートをかうためのたいせつな頭金。

ふたりに何をいったかはおぼえていない。ぼくは笛を握りしめ、啞然とする彼らをその場に残して、全速力で通りを走りだした。坂をのぼり、街はずれの林を抜ける。青色屋根のうちが見えてくる。なんだかいつもよりしんと静まっているような気がする。ぼくは足をもつれさせながら玄関へ飛びこんだ。

母さんが花瓶かびんをかかえてふりむいた。

「目がさめた、って？」

ぼくは二階に上がり、部屋の戸をあけた。先月五歳になったばかりの妹が、窓辺のベッドにすわっていちじくを食べていた。

眞っ赤な頬ほおで、こっちへと手をのばす。

ぼくは呆氣（あき）にとられ、立ちつくしたままでいった。

「うん！ ぜーんぜん平気！」

「やだあ、おにいちちゃん」

妹が笑う。

ぼくは（ 3 ）顔をあげ、

妹はベッドにすわりなおし、うーんとおおげさに腕組みうでくみをして、

枕元にはぼくが誕生日に贈った時計付き小型ラジオが置かれてある。ぼくがカフェにはいったのはまちがいなく午後の一時。いまは

三時を十分ほど過ぎたところ。

ぼくはめまいをこらえてたずねた。

「発作どころかあたし、もう歌だってうたえるよ！」

花瓶を床へおとした。

それから一週間も経たないうち、妹はもとどおり元気になった。ぼくがたき付けにしようとしたリコーダーを、ちょうどいちようだ
いといつてせがみ、日がな一日、裏庭のタイヤにすわって吹き鳴らしている。音痴なぼくの耳にさえ、妹の笛がすばらしい音を奏でて
いることはわかった。どんな練習をしたのかたずねると、勝手に指が動いてくれるの、と妹はこたえた。笛を吹きながらさ、なにか考
えてるのかい、そうきいてみると、

すいかを割ったような笑顔でいう。

夏休みがおわらないうち、人形劇団は街をでていった。広場のカフェへはあれから一度だけでかけてみた。ご主人は仏頂面で、顔を

布でぐるぐる巻きにした男のこと、笛のことは、いっさい口にしなかったし、ぼくと目線を合わそうとしなかった。ぼくのほうでも話しかけるつもりはない。カウンターの裏でいつも皿を洗っている、ご主人の甥っ子だというウェイターの声に、ぼくはたしかに聞き覚えがあるように思う。お客たちのうわさでは、手品師として以前、舞台上おだいに立ったことがあるらしい。賭けポーカーでいかさまをやつて、興行の世界からたたきだされたという。

ただ、ほんとうのことは知りようがない。あの男の顔は、ずっと布きれにくるまれていたし、店のふたりがぐるだって証拠は、どこ

ときどきむしゃくしゃしたことがると、ぼくは裏の物置にとじこもり、妹にやったあのリコーダーを低い音色で鳴らしながら

「あの店の屋根いますぐ落ちろ」

こころの中で強く念じる。まだ同じ曲を七回くりかえしたことはない。六度目を吹きおえたたん、なんだか胸のなかがざわざわとなってきた、すぐ物置からとびでてしまうのだ。

最近、近所のおばさん連中や、散歩途中のおじいさんが、庭の前に立ち止まり、妹の笛に耳をすませていることがよくある。おばさ

んたちは口々にいう。素敵ねえ。なんてきれいな音なのかしら。この世の音楽じゃないみたい。まったくあれは、魔法の笛だわ。ぼくは二階の窓から首をだして、

「魔法なんかじゃないよ！」（4）見あげる彼女らにいう。

「妹の腕がいいんだよ！ その笛はただの笛、そこいらにある普通の笛さ！」

（いしいしんじ 『魔法のリコーダー』による）

- （注1）さんたんたる・・・ひどい様である。
（注2）青物屋・・・野菜や果物くだものを売る店。
（注3）たき付け・・・火をたやすく燃えつかせるために用いるもの。
（注4）ウエイター・・・男性の店員。
（注5）ポーカー・・・カードゲームの一種。
（注6）ぐる・・・悪だくみをする仲間。

問一 部1「あからさまに」・2「肝はすわってる」・3「仏頂面」の意味として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

1「あからさまに」	2「肝はすわってる」
ア・たいそう イ・ちよっと ウ・たちまち エ・はつきりと オ・わざと	ア・性格はよい イ・度胸はある ウ・考えは深い エ・気性は きせう 激しい オ・見る目はある

3「仏頂面」

ア・あわれんだ顔 イ・怒りにみちた顔 ウ・おだやかな顔 エ・うしろめたい顔 オ・無愛想な顔

問二 （1）（ ）（4）に入る最もふさわしい言葉を次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

ア・ぼかんと イ・はっと ウ・ほっと エ・ぴしゃりと

問三 部①「拍子抜けした顔をしていた」とありますが、その理由として本文の中から最もふさわしい一文をさがし、最初の五字で答えなさい。

問四 部②「ぼくはなんだか無性に腹立たしく」とありますが、「ぼく」の腹立ちの理由として考えられないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア・ご主人は自分の気持ちを知っていてわざと妹の話題を出すから。
イ・ご主人は父のことを知らないくせにいい加減なことを言うから。
ウ・なかなか決断できない自分のせいでご主人が口をはさんだから。
エ・すぐに笛が欲しいのにご主人が横から余計な口出しをしたから。
オ・自分と関係のないところでご主人が話を勝手に進めているから。

問五 部③「呆氣にとられ」とは、意外なことに会っておどろきあきれるという意味です。ではここでいう「意外なこと」とはどういうことですか。四十字以内で説明しなさい。

問六 部④「ぼくは背中から芯が抜かれたみたいな気分」とありますが、「ぼく」の様子の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア・妹の返事により張りつめたものがなくなり、一気に疲労におそわれた。
イ・予想外の妹の答えを聞いて、それまでの熱い気持ちが冷めてしまった。
ウ・元気な妹を見たことで不安が全て消えてしまい、安心感につつまれた。

エ・元気な妹の姿を見て、道中考えていた様子との違いに衝撃を受けた。
オ・妹の話を聞いて、これまでこらえていた涙が一気にあふれてきた。

問七 部⑤「ぼくはめまいをこらえて」とありますが、めまいの原因として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア・妹の顔を一刻も早く見るために全速力で走ってきたこと。
イ・妹のことは聞いてもまだ現実を認識できていないこと。
ウ・母がお金のむだ使いを知ったら悲しむかもしれないこと。
エ・せっかくの魔法を使う機会なのに妹が元気になったこと。
オ・ままと男の口車に乗って笛を買わされてしまったこと。

問八 部⑥「まだ同じ曲を七回くりかえしたことはない」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア・妹のように純粋な願いであればよいが、自分のような不純な願いをするのは子どもとしてまずいと思われたから。
イ・いくらだまされたとはいえ、本物の魔法の笛の力を借りて仕返しをすることはあまりにもひどすぎると思ったから。
ウ・練習する妹の様子から考えて、もしかすると魔法の笛が本物かもしれない、魔法の力が発揮されるのを恐れたから。
エ・二人にだまされはしたものの笛のおかげで妹は元気になったのかもしれないので、心の底では感謝しているから。
オ・ただの笛だとまわりに言っているのに、もしも本当に屋根が落ちてしまったら自分がうそつきと呼ばれるから。

三

八歳の良平はずっとトロッコに乗りたと思っていました。次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

五、六町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。そこには両側の蜜柑畑に、黄色い実がいくつも日を受けている。
「登り道の方がいい、いつまでも押させてくれるから。」——良平はそんなことを考えながら、全身でトロッコを押すようにした。
蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになった。綿のシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ」と言った。良平はすぐに飛び乗った。トロッコは三人が乗り移ると同時に、蜜柑畑の匂いをおりながら、ひたすべりに線路を走りだした。「押すよりも乗るほうがずっといい。」——良平は羽織に風をはらませながら、あたりまえのことを考えた。「行きに押す所が多ければ、帰りにまた乗る所が多い。」——そうもまた考えたりした。

竹藪のある所へ来ると、トロッコは静かに走るのをやめた。三人はまた前のように、重いトロッコを押し始めた。竹藪はいつか雑木林になった。爪先上がりの所々には、赤錆の線路も見えないほど、落ち葉のたまっている場所もあった。その道をやっと登りきったら、今度は高い崖の向こうに、広々と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、あまり遠く来過ぎたことが、急にはっきりと感じられた。

(芥川龍之介 『トロッコ』による)

- (注1) トロッコ …… 線路を利用して土を運ぶ道具。
(注2) 五、六町 …… 町は距離を表す単位。一町はおよそ百九メートル。
(注3) 急勾配 …… 傾いている度合いが大きいようす。
(注4) 三人 …… 良平と二人の土工(工事現場で働く男)。良平は二人の土工とトロッコを押してきた。

問一 部①「蜜柑畑に、黄色い実がいくつも日を受けている」と、部②「高い崖の向こうに、広々と薄ら寒い海が開けた」の情景は、良平の心情を反映していると考えられます。それぞれどのような心情ですか。次のA・Bに合うように、どちらも十五字以内で答えなさい。

——部①に反映されているのはAという良平の心情であり、——部②に反映されているのはBという良平の心情である。

問二 この後、良平が無事に家にたどり着いたところで物語は終わります。もしその後続けて良平が家に入る場面を書くならば、どのように書きますか。次の三点に注意して百字以内で書きなさい。

- ① 良平の気持ちを反映するように、周りの情景を書くこと。
- ② 良平の気持ちに分かるように、良平の行動を書くこと。
- ③ 感情を表わす形容詞を使ってはいけません。

(形容詞とは「うれしい」や「悲しい」のように言い切る形が「い」で終わる、性質や状態を表わす語のことです。)

※のらんには何も書かないこと。

氏名	受験番号
----	------

三										二						一									
問二					問一		問六	問五		問三	問二	問一	問八	問七			問五	問三	問二	問一					
					B	A					1	1						1	ア						
							問七									問六	問四								
										2	2							2	イ						
									問四																
							問八																		
90	70	50	30	10				30	10	3	3		50	30	10			3	ウ						
										4								4	エ						
					という良平の心情	という良平の心情																			
100	80	60	40	20				40	20				60	40	20				オ						
※						※						※													

選